「撰時抄」

わが振る舞いこそ信心の結晶

（御書全集　二八八ページ三行目～同ページ七行目
編年体御書七五一ページ三行目～同ページ七行目）

経に云く「所謂諸法如是相」と申すは何事ぞ十如是の始の相如是が第一の大事にて候へば仏は世にいでさせ給う

「撰時抄」とは「時を撰ぶ御抄」という意味です。末法という時を凝視し、いかなる法を弘めるべきかを検討され、三大秘法の妙法こそ、末法の人々を救済する法であることを宣言された重書であります。

「時」ということについては、すでに「報恩抄」の講義のさい述べましたが、今回学ぶ個所は「余に三度のかうみょうあり」（御書全集二八七ページ）と、大聖人の三度にわたる予言がことごとく的中し、真

実の時を知るのは仏であることを、確信をこめて断言されている段の後半にあたります。

方便品の十如実相の文が「如是相」より始まることから「相」ということの重要性を説かれているところであります。「相」とは、一言にしていえば「如是相とは我が身の色形に顕れたる相を云うなり」（御書全集四一〇ページ）と示されているように、事実のうえに顕現された姿、振る舞いをいうのであります。

それでは、なぜ「十如是の始の相如是が第一の大事」であるかといえば、その点を論ずることが、天台の理の一念三千の法門と、日蓮大聖人の事の仏法との、根本的な相違を浮き彫りにするからであります。

天台大師は、どちらかというと心性を重んじ、己心を観じて十法界を明察する観念観法の修行を軸に、法理を展開しました。それに対し日蓮大聖人は、徹底して事実のうえの振る舞いを重視されたのであります。

「百六箇抄」においても「涌出品より已後・我等は色法の成仏なり」（御書全集八六二ページ）との文にみられるように、大聖人はしばしば、生命の色法の側面を、本門、随縁真如の姿としてとらえておられます。心法の側面は、まだ迹門、不変真如の理門にとどまっているわけであります。

思うに、日蓮大聖人の仏法を実践するにあたって、なにが要諦となってくるのでありましょうか。

それは、悟りとか決意、慈愛といったものが、心の領域にのみふみとどまっていてはならないということであります。心中に凝縮された一念は、即地涌の実践の場へと展転し、わが身に、わが生活、

わが人生に、いかなる事の振る舞いとなってあらわれたかという現実性、具体性こそ、日蓮門下にとって大事中の大事なのであります。

しかも大聖人はこのことを「相如是が第一の大事にて候へば仏は世にいでさせ給う」とおおせられている。すなわち、現実に仏が出現され、人間としての事実のうえに仏法を会得し、顕現していく方途を明かされたという歴史的事実こそ重要なのであります。

たしかに大聖人は、久遠元初の自受用報身如来であられる。しかしわれわれが、その偉大な存在をまぎれもない事実として覚知することができたのは、七百年前に大聖人が御出現になったからこそであります。

仏法は、キリスト教の〝神〟のように、遠き夢のかなたにあるのでもなければ、山中深くひっそりと説かれるものでもありません。現実に生きる人間のなかにのみ息づくのであり、さまざまな生活の葛藤のなかに豁然と開けゆく生命蘇生の泉なのであります。ゆえに大聖人は、民衆が雲集し、苦楽、愛憎の織りなす現実の真っただ中に飛び込んでいかれたのであります。

「日蓮末法に出でずば仏は大妄語の人・多宝・十方の諸仏は大虚妄の証明なり」（御書全集一一九〇ページ）

とのおおせがあります。

大聖人は御本仏でありますから、本来は、釈尊をはじめとする仏菩薩、あるいは人師、論師の証明など必要としないのであります。にもかかわらず、みずからの御出生を「日蓮末法に出でずば……」と、歴史の流れのなかに意義づけておられる。私は、この御金言のなかに、歴史性と現実性とをとく

に重視する事の仏法の骨髄を、垣間見る思いがしてならないのであります。まさしく「相如是が第一の大事」であります。

この「相如是」について、若干敷衍して、われわれの日常生活に即して申し上げれば、ここでいう「相」とはたんなる姿や形とは異なり、人間本然の生命のありようが、具体的な形として現れたものと拝せましょう。虚栄、虚飾によってつくられた姿ではなく、わが奥底の一念の発露であります。

その意味で顔色や目の輝き、言葉遣いから一挙手一投足にいたるまで、いっさいの振る舞いは、われわれの信心の姿そのものであります。一念の奥底に歓喜の脈打っている人ならば、顔色も生きいきと輝き、日々の言々句々や振る舞いのなかに、なんともいえぬ薫風の漂うような雰囲気がかもしだされているものであります。逆に、いくら表面の威儀をかざり、口でうまいことをいおうとも、顔色が悪く言葉に張りもなく、感情に流されているといった状態であったならば、なんの説得力ももちえないにちがいない。

とくに、人間の顔ほど正直なものはありません。私は以前、老境のトルストイの顔に刻まれた、人生のさまざまな風雪をくぐりぬけた重厚さについてふれたことがありますが、「聖教新聞」に連載された「信心20年の貫録」をながめながら、同様の感を深くいたしました。そこには、さまざまな年輩者の顔が見事な光彩を放っておりました。ともに懐かしい戦いの思い出を刻んできた方々であります。顔に刻まれた一本一本の〝笑顔皺〟は、病苦や生活難に果敢に挑戦しつつ戦ってきた信心の年輪を、

ほうふつとさせてあまりあるものであります。私は旧懐の情にひたりながらも、真金の人は、月々、年々に輝いていくものだな、との思いを深くせざるをえません。

古賢も「人いずくんぞかくさんや」と述べているように、信心していようといまいと、人々の目というものはじつに鋭い。われわれの何気なしの動作や片言隻句までも、敏感に感じとっているものであります。その意味からも、地域や近隣、職場でのふれあいにおいて信心の光を発する、金の輝きをもった存在となっていただきたい。

われわれが「教主釈尊の出世の本懐は人の振舞にて候けるぞ」（御書全集一一七四ページ）との御聖訓をとおして学んだように、その事実の姿こそ、信心の凝結なのであります。

まして時流は「実証」の時代であります。われわれの姿、行動はあくまで常識第一、良識第一に徹し、人々から「さすがだ」と賛嘆されるものとなっていかなくてはならない。大聖人は、折伏のさいの言葉遣いにいたるまで、じつに細かな配慮をすべきことを教えられております。

たとえば御書には「……和らかに又強く両眼を細めに見・顔貌に色を調へて閑に言上すべし」（御書全集一二八〇ページ）と述べられています。すなわち、感情に走ったり激したりすることなく、つねに顔面に笑みをたたえるほどの余裕をもって対話する。そして、静かななかにも、道理としていうべきことは堂々といいきっていく――という姿勢であってください。

その文の次下に「公場にして理運の法門申し候へばとて雑言・強言・自讃気なる体・人目に見すべからず浅猥しき事なるべし」（御書全集一二八三ページ）とおおせのように〝売り言葉に買い言葉〟的な雑

言、強言のたぐいや、独善的な言動は、厳に慎まなければなりません。そうでなければ、法を宣揚しているつもりで、かえって法を下げてしまうからであります。

仏法は道理ですから、世間の常識、良識を大切にしつつ「相如是が第一の大事にて候へば……」の文をそれぞれの立場で読みきり、「実証」の時代を、着実に歩んでいっていただきたい。

大法興隆の時を察知された大聖人

智人は起をしる蛇みづから蛇をしるとはこれなり

これは、日蓮大聖人が一閻浮提第一の聖人、すなわち末法の御本仏であることを述べられた文であります。

「智人は起をしる蛇みづから蛇をしる」とは、妙楽大師の法華文句記巻九の文を、日蓮大聖人の随自意の御境界によって、自在に転用されたものであります。

妙楽の文は「智人は智をしる」となっているが、日蓮大聖人は、あえて「智人は起をしる」とされている。ここに、日蓮大聖人が、智人すなわち仏というものを、いかにとらえられていたかが明らかでありましょう。

智人とはたんに智を知るだけであってはならない。智慧豊かな人であるだけでもならない。むしろ、あふれるがごとき智慧をもって、宇宙や自然の出来事、社会、人心の動向を察知し、悩める民衆を本源から救いきる慈悲と責任感に貫かれた人こそが、真の智人なのである。

「智人は起をしる」の「起」とは、天変地夭をはじめ、いっさいの現象の起こる原因や根本、ということであります。したがってこの御文は、日蓮大聖人こそ、三世に通達した仏眼をもって、世の中に起こるもろもろの現象の根本原因を知る真の智人であり、末法の御本仏であることを明かされた文となるのであります。

日蓮大聖人は、正嘉の大地震、文永の大彗星等の現象を三大秘法の仏法興隆の瑞相ととらえられ、相つぐ災難の到来によって動揺する暗黒の社会に対し、不惜身命の実践で妙法の光明を掲げつづけられたのであります。

ともかく、仏法のことは、仏にしかわからないのであります。仏の智のみが、仏法の正邪、いかなる仏法が時と機根にかなうかを知ることができるのである。

「蛇みづから蛇をしる」とは、蛇は、みずからの本能や習性により、自分の通る道を知っているという。人間にはまったくわからないが、蛇自身が知っている道があるのです。これはなにも蛇に限ったことではありません。

「日女御前御返事」にも「闇の中に影あり人此をみず虚空に鳥の飛跡あり人此をみず・大海に魚の道あり人これをみず月の中に四天下の人物一もかけず人此をみず、而りといへども天眼は此をみる」

（御書全集一二五〇ページ）とあります。

鳥が虚空を飛ぶのも、魚が海の中を泳ぐのも、それぞれに自分の道を知り、そこを通っているのであるが、人間には見えないとのおおせであります。

同様に、仏法には仏法の法則があり、因果律がある。凡夫には見えないけれども、仏、智人のみが、それを知ることができるのであります。正嘉の大地震、文永の大彗星等の打ちつづく災難も、凡夫にはまったくその因果関係がわからなかった。だが、御本仏日蓮大聖人には、はっきりと、大法が興隆する時を知らせる鐘であることがみえておられたのであります。

万代広布を凝視した大宣言

衆流あつまりて大海となる微塵つもりて須弥山となれり、日蓮が法華経を信じ始めしは日本国には一滴・一微塵のごとし、法華経を二人・三人・十人・百千万億人・唱え伝うるほどならば妙覚の須弥山ともなり大涅槃の大海ともなるべし

広宣流布の原理を示された御文です。とともに、この一節には、日蓮大聖人の広宣流布への烈々たる御確信が込められていると拝したい。

多くの流れがあつまって大海となる。わずかの塵が集積して須弥山となる――とは、洋々たる大海も、峨々たる大山も、その淵源をたずねれば、一滴、一微塵から成っていることを述べられたものです。

渓流は峻嶮な沢を下り、深き谷間を駆け、いくつもの支流を合して大河となり、やがて滔々と大海へそそぎ込む。はじめは一滴（ひとしずく）から始まっているのです。と同じように、広宣流布の流れも一滴から始まり、やがて大海となっていくと、天地自然の様相を例に、断言されているのです。

須弥山とは、古代インドの世界観、宇宙観で、その中心にあるとされる山です。この世界観は、天空に伸びるヒマラヤの山々をのぞむインド亜大陸の地理的位置づけと無関係ではないでしょうし、事実、いまも人はヒマラヤを白き神々の座と感じ、聖なるものとして畏敬の念をもっています。仏法上において、この須弥山は、仏の無上の正覚の象徴として、しばしば登場します。

たとえば「須弥山に近づく衆色は皆金色なり、法華経の名号を持つ人は一生乃至過去遠遠劫の黒業の漆変じて白業の大善となる、いわうや無始の善根皆変じて金色となり候なり」（御書全集一四〇五ページ）と御書の一節にあります。

ここでは広宣流布という巨大な偉業の建設を須弥山にたとえ、一微塵、一微塵が集まって、固く結合してこそ、広布の山並みはできあがっていくのだといわれているのです。

大聖人御在世当時、大聖人とその門下の存在は、日本において一滴、一微塵のごとくだったでありましょう。その大聖人の仏法が、今では約一千万人の友が喜々として担う広範な民衆の大宗教運動へ

と伸長し、生きいきと現実の庶民生活へ脈動しているのです。

まさしく、この「撰時抄」の一節にあふれる御本仏の大確信が、七百有余年の今日を確かに予測していたといってよい。元初の夜明けに立って、日蓮大聖人は、南無妙法蓮華経と呼号あそばされた。それは宇宙をもつつむ末法の御本仏としての第一声であられた。その一滴は、けっしてたんなる一滴ではない。大海をもはらんでいる。その一微塵は、たんなる一微塵ではない。大山をもつつんだ峻厳(しゅんげん)な因果の理法をはらんでいる。同じく私たちにおいても、一個の人間の変革は、その一人ひとりにとどまるものではない。全人類をもつつむであろう最小の瞬間である。これほどまでに一個の人間のスケールの大きさを説いた法理があるでありましょうか。

われらの人間革命の戦いは、やがて大海にいたるであろう道程であり、かつは大山を築くもっとも確実なる一歩一歩なのであります。

大聖人は「開目抄」のなかで、こうも述べておられる。

「一滴をなめて大海のし(潮)ををしり一華を見て春を推せよ」(御書全集二二二ページ)と。

また「当世・日本国に第一に富める者は日蓮なるべし命は法華経にたてまつり名をば後代に留(とど)めし、大海の主となれば諸の河神・皆したがう須弥山の王に諸の山神したがはざるべしや」(御書全集二二三ページ)と。

これらの御文に込められた御本仏の末法広宣流布の大確信にふれ、いまさらながら、わが身の福運を感ずるのであります。

〝一人をつかむは万人に通ず〟の方軌

つぎに「二人・三人・十人・百千万億人・唱え伝うるほどならば」とあることに注目したい。いかなる運動も歴史を概観するならば〝一人〟から始まっている。私どもの運動においてもまたしかりである。仏法はどこまでも〝一人〟〝一人〟の人間に焦点をあて、そこにいっさいの可能性を見いだしていく原理なのであります。

その〝一人〟の人間を最大に尊び、いかなる階層の人であれ、生命の絶対的尊厳の立場から、どこまでも平等に、徹底して守りぬいていく――これがわが人間革命運動の骨格をなすものであります。

そうした〝一人〟が〝二人〟となり〝三人〟となって、やがて百千万億人となる。この百千万億はたんなる数字というより、無限に、行き詰まりなく、ということです。

創価学会の歴史のうえにおいていうならば、草創期の渓流は、障魔の砂を下し、強敵の岩をはみ、いまや悠々と未来へ流れゆく大河を現出したことにあたるわけであります。大河は両岸に肥沃な大地を提供しつつ、社会貢献の実りをもたらしている。まさに「河が深ければその水は滑らかに流れる」（シェークスピア）実相ともいえるでありましょう。

わが創価学会は、無名の庶民が立ち上がって築いた尊い団体であります。権力によるものでもなければ、利害や好悪の感情によるのでもない。ただ、ひたぶるに汗と労苦によって築き上げた世界なの

であります。過去の悲惨な運命の曲から、色彩鮮やかな希望のメロディーへと変転していった一庶民の生活詩が、やがて万人の生活詩へとつづられていったのであります。

かつての釈尊の仏法を俯瞰するとき、それはいわば上からの改革であった。しかし、日蓮大聖人の仏法は「旃陀羅が家より出たり」（御書全集九五八ページ）とお示しのごとく、庶民の、下からの仏法流布の流れであり、この大聖人の御金言を事実のうえで証明したのが、日蓮正宗創価学会なのであります。

一人の覚醒に始まり、一人が一人の宝塔を開き、そのまた一人が次の一人の宝塔を開いていく――この地道にして着実なる〝下〟からの盛り上がりこそ、われわれがめざす真実の広宣流布の実像なのであります。したがって、かつての田中智学等の主張した国教的ないき方は〝上〟からの統制でことを運ぼうとしている点からも、大聖人の仏法と、根本的に反しているのであります。

ともかく、全国の会員の努力と熱誠によって、広宣流布の様相もようやく安定と向上の新たな段階に入りました。御本仏の御遺命どおりの仏法の世界に名を連ねる私どもは、こんどはみずからが一帝となり、一微塵となって、人間であることの共通の基盤に立ち、それぞれが信頼の核となり、新たな生命の自覚を呼び起こす運動を堅実に進めていくべきでありましょう。

そうしたみずからの新たな生命の自覚が、つぎの自覚ある一人を生み、それが二人、三人、十人と続いて、御聖訓のままに大涅槃の大海となり、妙覚の大山へと連なっていくのであります。

この世でもっとも偉大なものはなにか。それは太陽のいつも変わらぬ同じ運行が示すごとく、もっとも地道な作業を忍耐強く繰り返しゆく軌道のなかにあるといってよい。一人の人間の心を深く知

り、理解と信頼を得ていく作業は、たしかに忍耐と困難がつきまとう地道な労作業といわねばならない。しかし、だれが見ていようと、見ていなかろうと、黙々と一人ひとりの心と心を通わせ、そこに誠意と信頼を交流させゆく行為は、万人の心をつかむことに通ずるのであります。

恩師は叫ばれた。

「青年よ、一人立て！　二人は必ず立たん、三人はまた続くであろう」と。

いずれの時代にも方軌は同じであります。すべては〝一人〟からはじまり、それは新しい一人の胸中の輝きとなり、一人の光は万人の胸中の輝きへと広がっていくのであります。「星火燎原」という中国の言葉がありますが、一点の火が燎原の火となって燃え広がっていくとの意です。私どもの広布の時代は、まさに「妙法の星火燎原」といってよいでありましょう。

広布にかける生涯に人間革命

仏になる道は此れよりほかに又もとむる事なかれ

結論していうならば、広宣流布の道に進む以外に成仏はありえないということです。人を救うということは、自分自身の宿命転換に通ずるということであります。人の生命に妙法を湧現させていく戦

いをしていくことが、自分自身の生命の扉を開いていくわけであります。これは、あたかも地球が自転と公転を同時にしながら、己の厳しき軌道を運行している姿にも似ております。公転は広宣流布、成仏すなわち自己の人間革命は自転とも考えられます。

「此れよりほかに又もとむる事なかれ」――この一句に注目したい。この大聖人の強い鋭いおおせをどう受けとめて実践していくかということであります。一人だけの信仰などということはありえません。わが生涯を広布にかける――それ自体が偉大なる人間革命になっているのであります。

創価学会は、日蓮正宗を外護し、社会にあっては広宣流布をしていく団体であります。ゆえに、この創価学会を守護することが即、総本山を守護することに通ずるのであります。また広宣流布につながる。ゆえに、御宗門と学会が過去、現在、未来と永遠に一体となって進みゆくところに、幾層倍の広布への原動力が生まれることはいうまでもありません。

もったいなくも日達上人は、私どもに対し「わが国に創価学会があるかぎり、日本国は安泰であり、世界もかならず平和をたもつことができると断言できるのであります」とおおせくださっております。

広宣流布というものは、仏の所為であります。ゆえに、広宣流布を推進することは、如来の所遣として、如来の事を行ずることになる。この尊い使命を、僧俗一体となって進めていくところに、かならず広宣流布は実現していくことを確信していただきたいのであります。